

彦山川調査 第1次報告

田代 英美*
石出 千里** ・ 江川 美紗** ・ 上種 あゆみ**
工藤 夏美** ・ 杉元 綾** ・ 中村 汐里**
早川 怜香** ・ 松尾 綾華** ・ 山内 一成**

要旨 彦山川調査は、2014年度社会調査実習のテーマの一つとして実施しているものである。田川市内彦山川流域の川を活かしたまちづくり計画策定に、流域住民、地元大学、田川市役所、遠賀川河川事務所がともに取り組むことになり、その基礎調査を担当している。これまでに、彦山川と人との関わりの実際を把握するためのインタビュー調査と、市民および流域中学校生徒を対象とする質問紙調査を実施した。

本稿ではインタビュー調査結果と市民対象質問紙調査結果の一部を報告する。インタビュー調査から、川への関心の違いは川に関する経験の量と内容によると思われること、川への関心が大きいほど今後の利活用についても積極的であること、全体として川に関する情報が少ないことなどが分かった。今回分析した市民調査結果からは、川に関する経験の重要さや川に関する情報不足が確認された。今後分析を進めて、第2次報告を行いたい。

キーワード 社会調査、インタビュー調査、質問紙調査、かわまちづくり

1. 彦山川調査開始までの経緯と位置づけ

社会調査実習は公共社会学科の専門教育科目の一つである。社会調査は社会現象を分析する手法として各方面で利用されており、公共社会学科では社会調査士の資格（社会調査協会が認定）が取得できるカリキュラムを組んでいる。社会調査実習は社会調査の理論や手法を学ぶ

プロセスの総まとめとして、社会調査の企画から実施、分析、報告書作成まで行うものである。毎年度、担当教員と学生とで検討し決定したテーマごとに、1グループ10人前後で取り組んでいる。

彦山川調査は田川市総合政策課から打診されたのがきっかけである。近年は川の整備にも住民参加が基本となっており、彦山川を活かした

*福岡県立大学人間社会学部 教授

**公共社会学科3年

まちづくり計画策定に流域に住む人とともに本学の学生にも参加してもらえないかという趣旨であった。現場にいる人々、現場に関わっている人々との交流・協働を通して研究を進めるといふ公共社会学の研究方針にも合致するものであり、この計画策定事業の一画を担うことは学生に大きな刺激となると確信して、その場で参加を申し込んだ。

田川市においても彦山川の整備は大きな課題であり、住民の働きかけもあって、市行政と国土交通省遠賀川河川事務所が計画策定の準備を進めたのである。予定では、2015年度初めに流域のまちづくりや自然環境に調和した将来像をまとめた計画書「彦山川かわまちづくり夢プラン」(以下「プラン」と略記)を策定して公表することになっている。策定に当たるのは、地域の住民、地元活動団体、地元大学の教員や学生がメンバーとなる「彦山川の未来を描く会」(以下「描く会」と略記)および「彦山川夢プラン策定会議」(以下「策定会議」と略記)である。「描く会」が原案を作成し、「策定会議」がそれを審議して決定することになっている。原案作成の実質的な部分を担当するのが「描く会」であり、地元住民のほか本学公共社会学科学生と九州工業大学環境デザイン研究室の学生がメンバーとなっている。本学学生は川に対する住民の意識や計画への参加意向等のいわゆるソフト面、九州工業大学学生は自然環境調査や図面の作成等のいわゆるハード面を中心に調査研究を行うことにしている。田川市役所と遠賀川河川事務所が全体の事務局を担当している。2014年2月に「描く会」「策定会議」合同で第1回会議を開催し、この計画策定事業が正式に動き出した。

以上が彦山川調査を行うに至った経緯であ

る。彦山川調査は本学カリキュラム上は社会調査実習として実施している。同時に、地域社会のかわまちづくり計画の基礎調査部分に位置づけられている。地域の計画策定の一部として社会調査実習を行うのは公共社会学科では初めてである。学生にとって、調査から計画策定まで住民の方々や他大学学生、行政の方々と一緒に作り上げる体験は、作業量も責任も大きいが意義も大きい。参加している学生は公共社会学科3年生9人(石出千里、江川美紗、上種あゆみ、工藤夏美、杉元綾、中村汐里、早川怜香、松尾綾華、山内一成)である。

彦山川調査はインタビュー調査と質問紙調査の2段階で行うことにした。インタビュー調査は彦山川と人との関わりの実態を把握して、彦山川整備について仮説を構成する手がかりを得ることが目的である。次に、仮説に基づいて質問紙調査を行うことにした。

本稿ではインタビュー調査結果を中心に、併せて質問紙調査結果の一部を報告する。

2. 調査実施概要

インタビュー調査は4月～6月にかけて9回実施した。対象は「描く会」と「策定会議」の地元会員など、彦山川を良く知っていると思われる人、計24人である。年齢的には50歳代以上が大部分であった。方法は、ケースにより個別インタビューもあり、集団インタビューもある。場所は、対象者の都合により本学の教室、対象者の自宅、地域の公民館等を利用した。

インタビューでの主な質問項目は次のとおりである。

- ・彦山川への親しみ
- ・彦山川の今と昔

- ・彦山川の活用
- ・彦山川に関連するイベント
- ・飲み水について
- ・彦山川がきれいになったら何をしたいか

質問紙調査は20歳以上の田川市民と彦山川流域3中学校の生徒を対象とした。中学校生徒を対象者としたのは、今後流域のまちづくり計画を実施するに当たって若い世代がどのような考えを持っているのか、どのような計画であれば参加しやすいのかなどを聞いておく必要があると考えたからである。まちづくりを次世代に引き継ぐという意味では中学生はポイントとなる世代である。

質問紙調査の項目は市民対象と中学生対象とで基本的に同じである。

市民対象調査は住民基本台帳から無作為抽出で2005人を選んだ。調査票の配布・回収は郵送とした。9月下旬に実施し、回収率は25.6% (513票)であった。彦山川流域3中学校には校長先生の許可を得て全校生徒を対象とし、全クラスで担任の先生から調査票を配布・回収していただいた。実施時期は9月下旬である。配布数は588、回収率は81.1% (477票)であった。

調査の全過程にメンバー全員が関わっているが、本報告のインタビュー調査結果(3節)は工藤、山内、杉元、中村が、質問紙調査結果(5節)は上種、松尾、江川、早川、石出が執筆し、全体を田代が編集しまとめた。

3. インタビュー調査結果

表1はインタビュー調査結果を上流部・中流部・下流部別に、質問項目に沿って整理したものである。

上流部では堤防と川との落差が大きかった

り、川の整備がほとんどされていないので危険であるという意見がほとんどであった。また彦山川のイベントについて尋ねても、思い出がほとんどないと答えていた人が多く、出てきたとしても中流部の神幸祭のみであった。上流部では川に関する経験を持つ人が少なく、親しみがあまりないように感じた。外部からは自然が残って良い環境であるように見えても、住んでいる人にとっては整備されていない、危険というイメージが強いようである。

中流部では多くの人が川への親しみがあると語っている。その話の中には小さな頃川で泳いだ経験などがあつた。一方で、大雨や洪水などの影響で川があふれることを経験している人からは、親しみよりも川への怖さがあることが窺えた。

彦山川の今と昔を比べると、今の方が綺麗になったという人も何人かいたが、昔のほうが綺麗だったという人のほうが多くみられた。また、昔は泳いだり魚を捕ったりといった自然の遊びが今よりも多かったようである。

彦山川の活用については、飲み水をはじめとし、生活の中で彦山川を活用している人が多い中、神幸祭だけでしか主に使わないという意見もみられた。

彦山川のイベントについては、中流域ではイベントと聞くと神幸祭と考える人がほとんどで、多くの人から神幸祭について経験したことやその時の思いなどを聞くことができた。インタビューのときの様子をみても、神幸祭には非常に思い入れがあることが感じ取れた。一方で、神幸祭以外のイベントがないような印象を受けた。

飲み水は買ったものを飲んだり、浄水器をつけて使っていたりしている人がほとんどだっ

表1 インタビュー調査結果（流域別）
【上流部】（大任町との境～JR日田彦山線鉄道橋付近）

彦山川への親しみを感じますか。
<ul style="list-style-type: none"> ・（親しみを感ずる人は）大きな岩の上で遊んだ思い出がある。 ・（親しみを感ずらない人は）川よりも石炭のほうがなじみ深い。
彦山川の今と昔を比べて何か感じるがありますか。
<p>今：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シジミがいるのはいるが、昔ほどは採れない。 ・堤防はあるが、落差があって危険。 ・鎮西中学校付近の川は緑もなく危険。 ・散歩する人がいない。 <p>昔：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・60年ほど前は水がとてもきれいで、シジミが採れていたり、川でぼた石鹸を使って洗濯をしたりしていた。 ・洗炭場で石炭のカスが1mほど溜まっていた。 ・養鶏場が浸水してダメになった。 ・梅雨時期になると家の前や田んぼが浸水する。
彦山川をどのような時に利用しますか。
<ul style="list-style-type: none"> ・彦山川に行くのに時間がかかるのであまり行かない。
彦山川にまつわるイベントについて知っていることや考えをお聞かせください。
<ul style="list-style-type: none"> ・神幸祭で今でも法被が真っ黒に汚れることがある。 ・神幸祭で使われるパレンが折れたり、大きな岩があったため、山笠を運ぶのが大変だった。 ・神幸祭以外に川にちなんだイベントがない。
飲み水についてあなたはどのようにしていますか。またどのようにお考えですか。
<ul style="list-style-type: none"> ・一度煮沸したものを飲んでいる。 ・浄水器を家庭内で取り付けている。
もし川がきれいになったら何をしたいですか。
<ul style="list-style-type: none"> ・子供たちに遊び場を提供したい。 ・散歩したい。
何かご意見がございましたら、お聞かせください。
<ul style="list-style-type: none"> ・田川市内の彦山川の中で上流部が一番汚く、整備もされていないので、市が何とかしてほしい。 ・中流、下流では釣りをしている人がいるが、上流にはいない。 ・彦山川の最上流部（添田町）に生息する魚は食べることができる。 ・川の両端のゴミを掃除してきれいにしてほしい。

【中流部】（JR日田彦山線鉄道橋付近～東大橋付近）

彦山川への親しみを感じますか。
<ul style="list-style-type: none"> ・子供の頃、洪水のたびに橋が流れていたことや、大雨の時の計り知れない恐怖などから親しみもあるが、それよりも「怖さ」がある。 ・飲み水や田んぼなど、彦山川の水すべてで育っているため、親しみはある。 ・彦山川はなくてはならない存在である。 ・親しみは特に持っておらず、危険な川だとも思っていない。 ・高校卒業以来田川におらず、小学校の時に遊んだくらいで、親しみは正直に言うとなし。（調査日現在73歳） ・祭りを通しての親しみもある。 ・昔を懐かしむ気持ち（昔遊んでいたこと、滑って流された笑い話など）がある。 ・きれいな川ではなかったが、夏は泳いだりもしていた。
彦山川の今と昔を比べて何か感じるがありますか。
<ul style="list-style-type: none"> ・昔に比べ、安全にはなった。 ・今の水は汚く、水が臭い。子供の頃は臭いがした記憶がない。 ・炭鉱の頃と比べると今は澄んできたというが、砂地ではないため遊んでいた頃ほどではない。 ・草が生えないようにコンクリートになった。 ・大雨の時のために石垣になった。 ・上の世代からすると「ずいぶん綺麗になったよね」という感じ。 ・昔は彦山川で泳いで口の中に水が入って飲み込んでしまってもなんとでも思わなかったが、今彦山川の水を飲んでしまったらお腹を壊すと思う。 ・昔は石炭を川で洗っていたため、流れる水が黒かった。 ・石炭がよく採れていた頃は綺麗な川であったが、石炭が採れなくなると、一度使った石炭を再利用するために川を利用して洗ったため、水が汚くなった。 ・皆が言うような、川の水が真っ黒だった覚えはない。 ・昔は魚をとったりしていた。（食べるのが目的ではない）
彦山川をどのような時に利用しますか。
<ul style="list-style-type: none"> ・飲み水や田んぼなど、生活の全部で使っている。 ・生活の中心であり、なくてはならないもの。 ・朝の6時、散歩している人が多い。 ・ウォーキング、散歩として活用（田川第一ホテルから田川市立病院まで） ・季節ごとに渡り鳥を見ることができ、ほっとする。 ・彦山川を使う場面がなく、神幸祭だけでしか主に使っていない。
彦山川にまつわるイベントについて知っていることや考えをお聞かせください。
<ul style="list-style-type: none"> ・神幸祭以外の川祭りはない。

<ul style="list-style-type: none"> ・昔の神幸祭は沼を渡っている気分だった。 ・神幸祭は命懸けであり、昔は死者も出ていた。(石に埋もれ山笠が倒れたりしていた。) ・神幸祭以外の祭りといえばコールマインがある。 ・近年、川をきれいにしようとするイベントがある。(ここ20年は神幸祭の前後に地区の皆で川を掃除している。) ・船の遊びなどのイベントをしてはどうか。
<p>飲み水についてあなたはどのようにしていますか。また、どのようにお考えですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水道水に浄水器をつけて使っている。 ・水が良くない(カルキ、サビ、鉄臭い)ので、少し抵抗がある。 ・飲み水は買いに行っている。 ・彦山川の水を水道水にする時、含まれるカルキの量が他より多い。 ・ポットにカルキがすぐ溜まる。 ・金田、糸田など中元寺川からとってくる地区の水は汚い。 ・直方市などと比べて田川市の水は悪くないと思う。
<p>もし川が綺麗になったら何をしたいですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活の中で利用する場面がないため、きれいになってもならなくても、何の影響もない。 ・「彦山川を使って何をしたいか?」というのが正直な感想。 ・彦山川を使って未来のことは想像しにくい。 ・水泳、魚とりなどの、川の遊びをしたい。 ・子供を連れていくことのできる、家族だんらんの場になってほしい。 ・散歩の途中で腰をおろして眺めたい。 ・子供たちに食べる以外の生物との関わり方を伝えたい。 ・力づくで川をきれいにするのはなく、5年10年かけてきれいにしてほしい。
<p>何かご意見がございましたら、お聞かせください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・川は危ない場所だなどと言われて、どんどん次の世代に伝わっていく。 ・非常に危ない川というわけではないが、危険な場所もあり、そこは親や年上の人(先輩)などから注意され、教えられていた。 ←縦のコミュニケーションがあったが、今は薄れていると思う。 ・魚もみんなダメになってしまうため、ジャンボタニシを退治してほしい。

【下流部】(東大橋付近～福智町との境)

<p>彦山川への親しみを感じますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・愛着がない。 ・川があるなあと思うぐらい。
<p>彦山川の今と昔を比べて何か感じることはありませんか。</p> <p>今： <ul style="list-style-type: none"> ・川の水がきれいになったと感じる。 ・鳥がたくさんいる。 </p> <p>昔： <ul style="list-style-type: none"> ・大川と呼んでいた。 ・川の水が真っ黒だった。 ・上流にダムがなかった。 ・護岸工事がされるまでは、川で遊んでいた。 ・楠橋の下で遊んでいた。 ・カニ、ウナギ、フナ、ドンコ、ナマズがとれた。カニ以外は食べていた。 </p>
<p>彦山川をどのようなときに利用しますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・散歩をする。 ・鳥を見る。 ・子どもの頃のみ、川で遊んでいた。 ・遊びで川に飛び込んで、溺れて死ぬかもしれないこともよくあった。
<p>彦山川にまつわるイベントについて、知っていることや考えをお聞かせください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・神幸祭(楠区は毎年5月4日、5日) ・地藏盆(盆踊り) ・TAGAWAコールマイン(炭坑節祭り) ・TAGAWAコールマインで、昔、若松まで川下りをしたことがある。 ・コーンフェスタ(約10年前)
<p>飲み水についてあなたはどのようにしていますか。また、どのようにお考えですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔は別に買いに行っていた。 ・今は蛇口にろ過器を取り付け、水道水をろ過して飲んでいる。 ・塩素が気になる。 ・都会の水よりはきれいだと思っている。
<p>もし川が綺麗になったら何をしたいですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ふるさとの川=彦山川 という思いを定着させたい。 ・ふるさとを大事にしたいという意識付けが必要である。 (この問いに関しては、すぐに返答を得ることができなかった。)
<p>何かご意見がございましたら、お聞かせください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・洗剤を使うことに罪悪感があるが、これといった規制も何もないため、気にせず使っている。 ・水質の問題は、単に下水道が整備されていないために生じていると思っている。 ・陥落によってできた池がたくさんあって危険だった。

た。多くの人が飲み水について「汚い・カルキ臭い」などといった意見を言っており、飲み水の質はあまり良いとは思われていない。

もし川が綺麗になったら何をしたいかという質問に対しては、水泳や魚を捕るといった遊び、また子供や家族と遊ぶことができるようになってほしいという意見がある反面、川が綺麗になっても何の影響もないといったマイナスな回答もいくつかみられたため、もともとあまり活用しない人にとっては川の変化などは気にならないのかと感じた。

下流では、彦山川への親しみはほとんどないようである。もし川がきれいになったら何かしたいことがありますか、という問いに対して、質問項目の中で唯一すぐに返答を得ることができなかったことから、彦山川に対する日頃の興味・関心が低いことが窺える。

昔はよく川で遊んでおり、食べることができるといった数種の魚介類もとれていたことがわかった。そして、今は昔に比べ川の水がきれいになったと感じていることや、塩素が気にはなるが、都会の水よりはきれいだと思っていることなどから、水質について、現時点で特に問題視しているわけではないように感じる。

ふるさとの川＝彦山川という思いを定着させたい、ふるさとを大事にしたいという意識付けが必要である、といったことから、地域の方々に興味・関心を持ってもらい、さらに愛着を持ってもらうための環境づくりを行っていくべきではないかと思う。

最後に、流域別に整理した結果をもとに共通点と流域ごとの違いに注目してまとめる。

川への興味については個人差が大きく、中流部では興味を持っている人が多いように感じられた。その関心も彦山川へという以上に、神幸

祭へ向けられたものであることも多く、神幸祭あつての彦山川という印象が強い。川への関心が大きいほど、今後の彦山川について前向きな回答をする人が多かった。近年は水害は多くはないが、浸水等を経験した人にとっては彦山川は怖いというイメージが強いことも分かった。また、水質については、実際にはBODの数値が悪くなっているにもかかわらず、ほとんどの人が「昔よりもきれいになった」という必ずしも正確ではない認識を持っていることが分かった。

今後の活用については、上流部では強い願望は見られなかった。中流部や下流部では「魚釣りをしたい」や「子供に遊んでもらいたい」など前向きな意見があげられたが、上流部では「散歩をしたい」や「特にない」という意見が多かった。少数ではあるが、財政面を気にかけて「(整備するための) お金がないから」という声も聞かれた。あればよいと思うものや、やってみたいことを語る際にも、財政的なことを考え、意見することをためらっているように感じた。

4. インタビュー調査に基づく仮説の設定

インタビュー調査結果から、川を活かしたまちづくりや自然環境に調和した流域の将来像を計画する際には、2つのポイントがあると考えられる。

ひとつは、川に対する関心である。川に対する関心は川に関する経験の量や内容によると思われる。そうだとすれば、関心を高めるためには、川で遊ぶ、川原を散歩する、魚や鳥や植物を見るなど、経験の機会を増やす必要がある。インタビューからは、1950年代・1960年代に

子ども時代を過ごした人には川で遊んだり魚を釣ったりした思い出を持っている人が多いが、1970年代以降になるとそのような機会が減り、現在の子どもはほとんど川で遊ぶ経験をしていないのではないかとと思われる。川に触れる場と機会をどのように作っていくか、具体的に構想する必要がある。

ふたつめは、川や流域に関する情報である。彦山川は汚いというようなマイナスイメージを持っている人は多い。また、洗炭が行われていた頃は真っ黒な川であったが、その時期に比べると現在は川の色はかなり改善されたと語る人も多い。しかし専門家から見ると、川の状態を

測る指標は色だけではない。彦山川の水質は、洗炭はなくなったものの生活排水等の流入で問題があるという指摘がある。また、浸水に対する不安を抱えている地区もある。川を取り巻く自然環境や社会環境が変化しており、以前の記憶や知識とは異なる面も出てきている。現在の川の水質などに関して、事実とは異なる印象を持っている人が多かったことから、川や流域に関する情報提供の重要性が分かる。正確で、分かりやすい情報を、誰でも得ることができる場を確保することは重要な課題だと思われる。

川整備への参加意向に結びつく要因は、川に関する経験、川に関する知識・評価、川への関

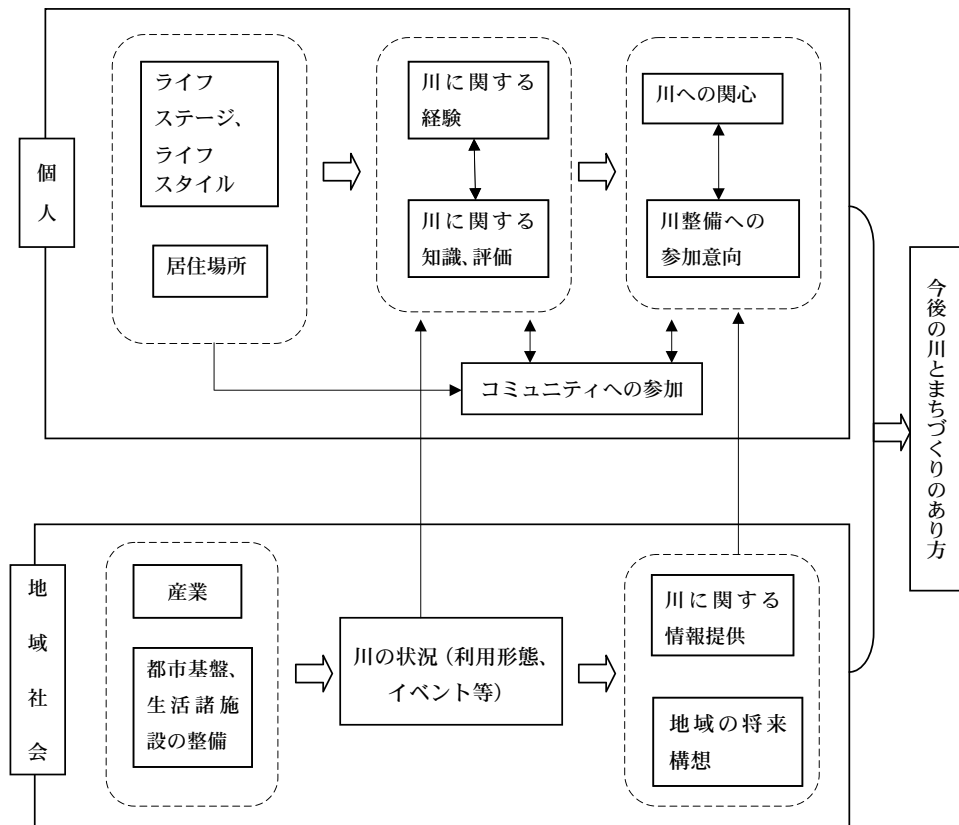


図1 川の経験・評価・関心に関する分析枠組

心であるという仮説が成り立つと考える。図1に现阶段での分析枠組を示す。この仮説をもとに質問紙調査の項目を作った。

5. 市民対象質問紙調査結果

質問紙調査は市民対象と彦山河流域3中学校生徒対象の2種を行ったが、ここでは市民対象の調査結果から、川への親しみや計画への関心など主要7項目の結果を述べる。クロス集計は性別、年齢別、川の利用別の結果を示す。市民対象調査の複数回答の項目や自由回答および中学生対象調査結果については後日報告したい。

(1) 単純集計結果

まず、回答者の属性を見ておく。性別では(表2)、男性が48.8%、女性が36.6%で、男性が10%以上多い。市民全体では男性は45.3%、女性は54.7%(平成22年国勢調査)であるので、今回の質問紙調査には男性の方がより多く回答していることになる。また、無回答が14.6%と比較的多かった。年齢別では(表3)、60歳代

表2 回答者の性別

	度数	パーセント
有効 男性	287	48.8
女性	215	36.6
無回答	86	14.6
合計	588	100.0

表3 回答者の年代

	度数	パーセント
有効 20歳代	12	2.0
30歳代	46	7.8
40歳代	56	9.5
50歳代	100	17.0
60歳代	144	24.5
70歳代	112	19.0
80歳以上	74	12.6
無回答	44	7.5
合計	588	100.0

が24.5%と1/4を占めている。60歳代を中心として50歳代以上で73.1%となる。今回の調査結果を見る際には、年齢分布の偏りを考慮する必要がある。

表4は、住居と最も近い川までの時間距離を尋ねた結果である。この質問は、川に近い場所に住んでいる人は遠くに住んでいる人に比して、川に触れる機会や川のことを知る機会が多いと思われるため、クロス集計に利用する目的で入れたものである。結果は、「5分未満」と「5分~10分」がそれぞれ約20%で、川近くに住んでいる人が比較的多いと言える。

表4 住居から川への距離

	度数	パーセント
有効 5分未満	125	21.3
5~10分	128	21.8
11~15分	91	15.5
16~20分	70	11.9
21~25分	33	5.6
26~30分	42	7.1
31分以上	35	6.0
わからない	20	3.4
無回答	44	7.5
合計	588	100.0

表5は川を利用した経験の有無を聞いた結果である。全体の67.0%が川を利用する機会がないことが分かった。利用する機会がなければ、川に関心を持つこともないだろうと予想される。

表6は川を利用することがある人に、その頻度を尋ねた結果であるが、全体として利用頻度はあまり多くはない。

表5 川の利用経験

	度数	パーセント
有効 ある	168	28.6
ない	394	67.0
無回答	26	4.4
合計	588	100.0

表6 川の利用頻度

		度数	パーセント	有効パーセント
有効	毎日	19	3.2	9.8
	週に1回	33	5.6	17.0
	月に1回	46	7.8	23.7
	半年に1回	37	6.3	19.1
	年に1回	39	6.6	20.1
	その他	4	0.7	2.1
	無回答	16	2.7	8.2
合計	194	33.0	100.0	
欠損値	非該当	394	67.0	
合計		588	100.0	

川に関する地域ごとのイベントの有無(表7)については、「ある」は21.3%である。イベント認知の少なさは、多くの人が自分の地域の川に足を向ける機会が少ないこと、利用頻度が少ないことにつながっているのではないかと考えられる。

続いて川の話題やニュースについて考えていく。表8は「家庭で川のことが話題になるか」という質問、表9は「川のニュースをよく見聞きするか」という質問に対する回答である。どちらも半数以上が、川のことは話題やニュースにあがらないと回答している。川を利用する人がいない、いても利用頻度が少ないことが、この項目からも窺える。

表7 川に関するイベントの有無

		度数	パーセント
有効	ある	125	21.3
	ない	235	40.0
	わからない	199	33.8
	無回答	29	4.9
	合計	588	100.0

表8 家庭での川に関する話題

		度数	パーセント
有効	よく話題	13	2.2
	時々話題	138	23.5
	あまりならない	132	22.4
	ほとんどならない	269	45.7
	無回答	36	6.1
	合計	588	100.0

川の利用・利用頻度が少ないことを上述した

表9 川のニュース

		度数	パーセント
有効	よくある	13	2.2
	時々ある	151	25.7
	あまりない	200	34.0
	ほとんどない	194	33.0
	無回答	30	5.1
	合計	588	100.0

が、表10より、彦山川に親しみを「とても感じる」「少し感じる」を合わせると55.7%であり、親しみを感じる人が多いことがわかる。田川市民にとって「彦山川」は川渡り神幸祭といった古くからの歴史もあることから、親しみは比較的高いように思われる。

表10 彦山川に関する親しみ

		度数	パーセント
有効	とても感じる	105	17.9
	少し感じる	222	37.8
	あまり感じない	95	16.2
	ほとんど感じない	83	14.1
	どちらとも言えない	61	10.4
	無回答	22	3.7
	合計	588	100.0

表11は現在計画中の彦山川プランへの関心、表12は計画策定後の実施段階への参加意向である。計画への関心は「とてもある」が22.1%、「少しある」が45.4%で、関心は高いと言える。彦山川に対する親しみの高さとも関連しているのかもしれない。しかし参加意向では「積極的に参加したい」は4.6%と非常に少なく、約半数は「内容による」と回答した。市民の参加意欲を高めるためにも、人々が興味を持てる

表11 彦山川プランへの関心

		度数	パーセント
有効	とてもある	130	22.1
	少しある	267	45.4
	あまりない	115	19.6
	ほとんどない	54	9.2
	無回答	22	3.7
	合計	588	100.0

表12 計画実施への参加意向

	度数	パーセント
有効		
積極的に参加したい	27	4.6
内容によっては	302	51.4
あまり思わない	124	21.1
思わない	107	18.2
無回答	28	4.8
合計	588	100.0

プラン内容を考えていく必要がある。

(2) 性別クロス分析

性別で有意差がみられた項目は (p < .05)、川の利用経験とイベントの有無の把握の2項目であった(表13、表14)。どちらも男性の方に「ある」の比率が高い。このことから、男性は女性よりも川に関わりがあると言える。他方、

表13 性別と川の利用のクロス表 p=.000

	川の利用		合計
	ある	ない	
性別			
男性	度数	104	171
	性別の%	37.8%	62.2%
女性	度数	46	162
	性別の%	22.1%	77.9%
合計	度数	150	333
	性別の%	31.1%	68.9%

表14 性別とイベントの有無のクロス表 p=.003

	イベントの有無			合計
	ある	ない	わからない	
性別				
男性	度数	69	128	82
	性別の%	24.7%	45.9%	29.4%
女性	度数	39	79	93
	性別の%	18.5%	37.4%	44.1%
合計	度数	108	207	175
	性別の%	22.0%	42.2%	35.7%

表15 年齢と川のニュースのクロス表 p=.010

	川のニュース				合計
	よくある	時々ある	あまりない	ほとんどない	
年齢					
20歳代~40歳代	度数	1	23	35	55
	年齢2の%	0.9%	20.2%	30.7%	48.2%
50歳代	度数	2	23	40	34
	年齢2の%	2.0%	23.2%	40.4%	34.3%
60歳代	度数	4	36	49	47
	年齢2の%	2.9%	26.5%	36.0%	34.6%
70歳代以上	度数	5	66	64	46
	年齢2の%	2.8%	36.5%	35.4%	25.4%
合計	度数	12	148	188	182
	年齢2の%	2.3%	27.9%	35.5%	34.3%

彦山川の親しみや計画への関心に関しては、性別は関係がないと言える。

(3) 年齢別クロス分析

年齢別で有意差が見られたのは (p < .05)、川のニュース(表15)、計画実施への参加意向(表16)の2項目であった。

川のニュースを見たり聞いたりすることが「よくある」、「時々ある」と答えた人は20歳代~40歳代では合わせて約20%で、年代が上がっていくにつれて高くなっていき、70歳代以上になると約40%と20歳代~40歳代の2倍であることが分かる。他方、「あまりない」、「ほとんどない」の比率は、70歳代以上よりも20歳代~40歳代と年代が下がっていくにつれて高くなる傾向がある。若年層より中高年層が川のニュースを相対的に多く見聞きしていると言える。

計画実施に「積極的に参加したい」、「内容によっては参加したい」は20歳代~40歳代では合わせて62.8%で、50歳代では66.0%と同様の比率である。60歳代、70歳代以上と年代が上がっていくにつれて低くなっていくことが分かる。他方、50歳代を除いて年代が上がっていくにつれ、「あまり思わない」、「思わない」と答える比率が高くなっている。数値的にはそれほど大きな差異はないが、高齢世代のほうに参加

表16 年齢と計画実施への参加意向のクロス表 p=.032

		計画実施への参加意向				合計
		積極的に参加したい	内容によっては	あまり思わない	思わない	
年齢2	20歳代～40歳代	度数 8	61	18	23	110
	年齢2の%	7.3%	55.5%	16.4%	20.9%	100.0%
	50歳代	度数 6	60	21	13	100
	年齢2の%	6.0%	60.0%	21.0%	13.0%	100.0%
	60歳代	度数 2	81	36	21	140
	年齢2の%	1.4%	57.9%	25.7%	15.0%	100.0%
	70歳代以上	度数 8	76	43	42	169
	年齢2の%	4.7%	45.0%	25.4%	24.9%	100.0%
合計	度数	24	278	118	99	519
	年齢2の%	4.6%	53.6%	22.7%	19.1%	100.0%

表17 川の利用と川の話題のクロス表 p=.000

		川の話題				合計
		よく話題	時々話題	あまりならない	ほとんどならない	
川の利用	ある	度数 9	65	42	42	158
	川の利用の%	5.7%	41.1%	26.6%	26.6%	100.0%
	ない	度数 3	65	82	221	371
	川の利用の%	0.8%	17.5%	22.1%	59.6%	100.0%
合計	度数	12	130	124	263	529
	川の利用の%	2.3%	24.6%	23.4%	49.7%	100.0%

意向がやや少ないという結果であった。

年齢別では、川の利用経験や彦山川への親しみ、プランへの関心等で有意差がないなど、私たちの予想と異なる点があった。逆に言えば、彦山川への親しみや川の利用経験は年代に大きくは影響されないということになる。計画策定や実施に当たって若年層の関心をさらに高める工夫が必要であると思われる。

(4) 川の利用経験別

表17から、「川の利用がない」場合、家庭内で川が「よく話題になる」人はわずか0.8%ときわめて低く、川の話題に「ほとんどならない」

人は59.6%と高かったことが分かった。一方、「川の利用がある」場合、川が「よく話題になる」人、「時々話題になる」人が5.7%、41.1%と「川の利用がない」場合に比べ相対的に高い。このように、「川の利用がない」人ほど、家庭内で川の話題があがることが少なくなることが分かった。ただし、川の話題に「ほとんどならない」と回答した人は全体で49.7%と高い。

表18より、「川の利用がない」場合で川に関するイベントが「ある」と回答した人は15.2%と、「川の利用がある」場合の36.6%と比べて低かった。また、川に関するイベントが「ない」、「わからない」と回答した人が46.4%、38.4%と

表18 川の利用と川イベントの有無のクロス表 p=.000

		イベントの有無			合計
		ある	ない	わからない	
川の利用	ある	度数 59	55	47	161
	川の利用の%	36.6%	34.2%	29.2%	100.0%
	ない	度数 57	174	144	375
	川の利用の%	15.2%	46.4%	38.4%	100.0%
合計	度数	116	229	191	536
	川の利用の%	21.6%	42.7%	35.6%	100.0%

「川の利用がある」場合の34.2%、29.2%と比べて高かった。「川の利用がある」人ほど、川に関するイベントや行事について知っている傾向がある。

表19から、「川の利用がある」場合と「川の利用がない」場合との間にはそれほど大きな差が見られなかった。意識しないために気がつかないのか、実際にニュース等の情報が少ないためかは分からないが、情報を受け取る機会が圧倒的に少ないことが分かる。

表20より、「川の利用がある」場合で彦山川への親しみを「とても感じる」は31.9%、「少し感じる」は46.6%であり、「川の利用がない」場合のそれぞれの回答の11.3%と36.4%より相対的に高い。一方、「川の利用がない」場合

で彦山川への親しみを「あまり感じない」は19.3%、「ほとんど感じない」は18.5%、「わからない」は14.5%と、「川の利用がある」場合のそれぞれの回答の12.3%と7.4%、1.8%に比べて多かった。このことから、川を利用している人の方が彦山川に対して親しみを感じ、川を利用していない人は利用している人と比べて親しみを感じない傾向がある。

表21より、「川の利用がある」場合でプランへの関心が「とてもある」と回答した人は36.0%で、「川の利用がない」場合の16.7%より約20%高い。一方、「川の利用がない」場合でプランへの関心が「あまりない」と回答した人は24.1%、「ほとんどない」と回答した人は13.5%で、「川の利用がある」場合でプランへ

表19 川の利用と川のニュースとのクロス表 p=.022

			川のニュース				合計
			よくある	時々ある	あまりない	ほとんどない	
川の利用	ある	度数	6	44	69	43	162
		川の利用の%	3.7%	27.2%	42.6%	26.5%	100.0%
	ない	度数	7	97	123	146	373
		川の利用の%	1.9%	26.0%	33.0%	39.1%	100.0%
合計		度数	13	141	192	189	535
		川の利用の%	2.4%	26.4%	35.9%	35.3%	100.0%

表20 川の利用と彦山川への親しみのクロス表 p=.000

			彦山川への親しみ					合計
			とても感じる	少し感じる	あまり感じない	ほとんど感じない	どちらとも言えない	
川の利用	ある	度数	52	76	20	12	3	163
		川の利用の%	31.9%	46.6%	12.3%	7.4%	1.8%	100.0%
	ない	度数	43	138	73	70	55	379
		川の利用の%	11.3%	36.4%	19.3%	18.5%	14.5%	100.0%
合計		度数	95	214	93	82	58	542
		川の利用の%	17.5%	39.5%	17.2%	15.1%	10.7%	100.0%

表21 川の利用と彦山川プランへの関心とのクロス表 p=.000

			彦山川プランへの関心				合計
			とてもある	少しある	あまりない	ほとんどない	
川の利用	ある	度数	59	81	21	3	164
		川の利用の%	36.0%	49.4%	12.8%	1.8%	100.0%
	ない	度数	63	173	91	51	378
		川の利用の%	16.7%	45.8%	24.1%	13.5%	100.0%
合計		度数	122	254	112	54	542
		川の利用の%	22.5%	46.9%	20.7%	10.0%	100.0%

の関心が「あまりない」、「ほとんどない」と回答した12.8%、1.8%と比べて高くなっている。また、「川の利用がある」場合と「川の利用がない」場合のどちらにおいても、プランへの関心が「少しある」と回答した人はそれぞれ49.4%、45.8%と高い割合を示している。このことから、全体的にプランへの関心があることが分かる。

表22より、「川の利用がある」場合で、計画実施に「積極的に参加したい」と回答した人は11.9%であったのに対し、「川の利用がない」場合はわずか1.9%であった。一方、「川の利用がない」場合で「あまり参加したいと思わない」、「思わない」と回答した人はそれぞれ25.0%、24.7%であり、「川の利用がある」場合の15.7%、6.3%より相対的に高い。また、「川の利用がある」場合と「川の利用がない」場合のどちらにおいても、計画実施への参加意向について「内容によっては参加したい」と回答した人はそれぞれ66.0%、48.4%と高い割合を示している。全体的にみると内容によっては参加したいと考える人が最も多い一方で、川を利用しない人ほど計画実施への参加意向が低いことが分かった。

以上のことから、川の利用の有無にかかわらず、全体として情報を受け取る機会が少なくとと考えられる。しかし、川を利用する人は家庭等で川が話題になることが多く、イベントや行事

についてよく知っているが、川を利用しない人は話題になることが少なく、イベントや行事についてあまり知らないことから、川の利用が情報交換の媒体になり得ると考えられる。

6. まとめ

「彦山川プラン」策定事業開始から9か月を経たが、その間、本学メンバーが彦山川を知る機会をさまざまな形で（川の観察、川に関する専門的な話、川遊び等々）得られたこと、多くの方々にインタビュー調査に快く応じていただいたこと、質問紙調査がスムーズに実施できたこと等々、「描く会」のメンバーとなって活動してきたからこそその成果である。「描く会」「策定会議」のメンバーの方々、インタビュー調査や質問紙調査に応じていただいた方々に心よりお礼申し上げますとともに、地域でのまちづくり計画に資する調査結果を残すことが私たちの義務であるという自覚をもって今後のデータ分析を行いたい。

現在はまだ質問紙調査データ分析の第一段階であるが、川に関する経験の重要性や川に関する情報不足が確認されたことは重要である。また、川に関する経験は、インタビュー調査から、年代によってその量や内容が異なるのではないかと予想していたのであるが、市民調査の結果はその予想と異なるものであった。

今後、市民調査データの分析とともに中学生

表22 川の利用と計画実施への参加意向のクロス表 p=.000

		計画実施への参加意向				合計	
		積極的に参加したい	内容によっては	あまり思わない	思わない		
川の利用	ある	度数	19	105	25	10	159
		川の利用の%	11.9%	66.0%	15.7%	6.3%	
川の利用	ない	度数	7	182	94	93	376
		川の利用の%	1.9%	48.4%	25.0%	24.7%	100.0%
合計		度数	26	287	119	103	535
		川の利用の%	4.9%	53.6%	22.2%	19.3%	100.0%

調査データの分析を進め、仮説全体の検証を行うことにしている。社会調査実習の最終段階では調査結果から計画策定に当たっての課題を導くことを目指す。課題提案においても、学外のさまざまな方々とともに計画策定事業に携わることから刺激を得ていきたいと考えている。